

## 生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近(2年次)

### ～本質を体感する学びを実現することを通して～

#### Ⅰ 研究主題の設定

##### (1) 研究の目的

私たち和歌山大学教育学部附属小学校の教員は、子供たち一人一人が幸せに生きること、そのために必要な力を身に付けていくことを願って子供たちの前に立っている。子供たちも児童会が中心となり、学校スローガンを「みんなでみんなを幸せにする学校」と一昨年度に設定した。本校の子供たち全員がそう考えているわけではないかもしれないが、幸せに生きたいということに反対の子供はいないだろう。では、「幸せに生きる」とはどのようなことなのだろうか。「周りの人と仲良く関わりながら楽しく過ごしている」「将来、自分が選んだ仕事に就いて活躍している」など幸せに生きることの捉え方は人によって違いがある。本校で大切にしたいのは、本校に関わるすべての人が共有できる幸せである。自分の幸せだけを追い求めるのではなく、自分の周りの人々も幸せを感じているかどうかという視点をもてるようになることである。「みんなでみんなを」と子供たちが考えているのは、子供たちも教員と同じ思いをもってると捉えられる。本校教員の思いや子供たちの掲げる学校スローガンを実現するためには、子供が自分も周りの人も共に幸せに向かう力を身に付け、身に付けた力を発揮していくことが求められる。「自分も周りの人も幸せに向かうためには、小学校でどのような力をどう身に付けていけばいいか」を見いだす研究を進めていく。

##### (2) ラーニング・コンパスの中心概念である生徒エージェンシー

本研究を進めるにあたって、まずは、共に幸せに向かうためにはどのような力が必要かを考えるところから始めた。共に幸せに向かうために欠かせないものは、社会の変化に主体的に関わり、人生や社会をより良いものにしていくために働きかける態度や力であると考えた。個人の幸福を追究することと同時に社会や周囲の幸福も追究することが重要である。このことは、「OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤) 2030」(図1) (以下、「ラーニング・コンパス」と略記)と重なる。



図1 OECD Learning Compass 2030 (文科省 資料「新たな教師・教職員集団の持続的な成長について」より引用)

ラーニング・コンパスの中で示されている目標は、ウェルビーイング (well-being) である。ウェルビーイングには様々な捉えがあるが、中央教育審議会教育振興基本計画では次のように述べられている。

ウェルビーイング (well-being) ；

- ・身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。
- ・多様な個人がそれぞれ幸せや生きがいを感じるとともに、個人を取り巻く場や地域、社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることも含む包括的な概念。

ウェルビーイングの概念は、「自分だけでなく周りも幸せにする」という本校教員や子供の願いと重なるといえるのではないだろうか。したがって、ウェルビーイングを目標とするラーニング・コンパスの理念を拠り所にしながら、共に幸せに向かう力を見いだしていくことで教員の思いや学校スローガンの実現に進んでいくことができると考えた。

ラーニング・コンパスでは、中心的な概念として「生徒エージェンシー (Student agency)」が位置付けられている。ラーニング・コンパスにおいて生徒エージェンシーは以下の様に定義されている。

生徒エージェンシー (Student agency) ；

変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力

自分たちが実現したい未来に向かって、周りを巻き込みながら行動に移していく能力が生徒エージェンシーである。この生徒エージェンシーを発揮することで、主体となって自らが生きる社会をより良いものへと変えていき、結果として自分も周りの人々も幸せに生きようになると本校では考えた。以上より、子供たちが生徒エージェンシーを発揮することを目指して研究を進めていく。

### (3) 研究主題

本校は、教科の学びを研究する立場であるので、教科の学びをどのようなものにすれば子供たちが生徒エージェンシーを発揮することにつながる学びになるのかを見いだすべく、研究主題を次のように設定した。

2024 研究主題

生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近

## 2 研究副題の設定

### (1) 生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科の位置付け

本校が目指す生徒エージェンシーは予測困難な社会の問題に出合った場面での発揮を想定している。そのような場面において、主体となって解決するために行動する、つまりは変革を起こす行動をするためには、様々な資質・能力が必要になる。例えば、批判的思考力や言語感覚である。批判的思考力が身に付いていなければ社会変革の場面においてより良い判断ができなかったり、言語感覚が身に付いていなければ自分の思いを正しく伝

えることができなかつたりする可能性がある。本校においては、これらの資質・能力を各教科の学びを通して身に付ける。このことは、ラーニング・コンパスに示されてあることに重なる。ラーニング・コンパスにはウェルビーイングに向けて必要な知識、スキル、態度・価値というコンピテンシー（competencies）<sup>1</sup>や基盤となる力<sup>2</sup>がコンパスの中心に描かれている。さらに、多様なコンピテンシーの中でもウェルビーイングに向かっていくために特に重要なコンピテンシーとして、より良い未来の創造におけた変革を起こす力<sup>3</sup>がコンパスの外側に描かれている。生徒エージェンシーを発揮するためには、変革を起こす力を含む様々なコンピテンシーや基盤となる力が欠かせないことを示してある。これらのコンピテンシーや基盤となる力を発達させることが生徒エージェンシーの発揮につながると考え、各教科の学びを以下のように位置付けた。

本校における各教科の学び；

生徒エージェンシーを発揮するためのコンピテンシーや基盤となる力を養うこと

## (2) 各教科の本質を体感する学びにする

子供が生徒エージェンシーを発揮するためのコンピテンシーや基盤となる力を養うために、教科の学びをどのような学びにすればいいのだろうか。本研究では、各教科の本質を体感する学びにすることで、生徒エージェンシーを発揮するためのコンピテンシーや基盤となる力の育成を目指す。まずは、本校が考える教科の本質を定義する。本校では、教科の本質を以下の様に定義した。

本校における教科の本質；

教師がその教科について深く考えて見出したその教科を学ぶことによって得られる根本的で重要な意義

教科の本質を定義するにあたり、根本的で重要な意義としたのは、教育における各教科が果たす役割や目的が重要であると考えたからである。これらを教師が自覚することで、単なる知識や技能の獲得ではなく概念理解まで見据えた学びの実現やその教科ならではの学びの在り方を子供が行えるよう環境を整えることにつながる。また、奈須（2017）は本質について「その教科の学ぶ意義を考えることで、その教科の固有の知識やスキル、価値観や方法論を考える機会になる」と述べており、本校が定義した本質と重なる。さらに奈須は、「それを見据えた授業の実施こそが、結果的に子供たちにコンピテンシーを育むのであり、子供たちが明晰な自覚をもってその教科ならではの見方・考え方を身に付け、さらにその教科が主に扱う領域や対象を踏み越えて、それらを様々な問題解決に自在に駆使できるようになる」と述べている。つまり、教科の本質を見据えた授業の実現により、それぞれの教科の概念理解や見方・考え方の獲得だけでなく、異なる教科や知識の関連性まで理解しやすくなり、子

<sup>1</sup> 白井俊 『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』 p.2 より引用 コンピテンシー（competencies）とはある職務または状況に対し、基準に照らして効果的、あるいは卓越した業績を生む原因としてかかわっている個人の根源的特性をさす。具体的には、動因、特性、自己イメージ、知識、スキルから構成される複合的なものとして位置付けられている。

<sup>2</sup> OECD Learning Compass 2030 仮訳『OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030』では、基盤となる力として、数学的基礎学力、読解的記述力、デジタルリテラシー、データリテラシー、ヘルスリテラシーが記されている。

<sup>3</sup> OECD Learning Compass 2030 仮訳『OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030』では、より良い未来の創造にむけた変革を起こす力として、新たな価値を創造する力、対立やジレンマに折り合いをつける力、責任ある行動をとる力の3つが挙げられている。

供のコンピテンシーの育成に寄与していくといえる。したがって、その教科の根本的で重要な意義をまずは教師がしっかりと考えることが、生徒エージェンシーを発揮するためのコンピテンシーや基盤となる力を養うことにつながると考えた。

あわせて、その教科を学ぶ意義をしっかりと考える教師の姿勢も重要だと考えている。本研究は子供の生徒エージェンシーの発揮を目指す研究であるため、教師自身が教師エージェンシーを発揮することが求められる。生徒エージェンシーはあらゆる他者と相互に関わり合うことで育まれるものであり、学校においては教師が与える影響が大きくなるからである。小柳(2019)<sup>4</sup>は教師のエージェンシーについて、「教員が自分の教育活動と学校の取組を向上させるために、同僚と互に関わり学び合うことを通じて、子供のため、自分のため、そして同僚のために何か貢献しているという、この違いを生み出す感覚と違いを生み出すことに向けた動機、主体的な態度」と定義している。様々な場面における教師の主体的な姿勢が必要になるが、その教科の意義を学び続ける教師の姿勢も子供たちの生徒エージェンシーにつながっていくと考えた。子供たちにとって最適な環境を創る存在でありたい。

さらに、本研究では、教師が見いだした教科の本質を子供が体感することを実現したい。本質を体感する学びとは、どのような学びか。それは、単に表面的な情報や事実を覚えるのではなく、その背後にある意義を五感で感じるような学びを指す。学ぶ内容の根底にある重要な概念や原理を理解し、それを知識として頭で理解するだけでなく、感覚的・経験的にも実感することで、子供たちは知識や技能を単に習得するにとどまらず、実際の経験と結びつけて習得した知識や技能を活用しようとしたり、自分自身の生活や社会における実際の問題に適用したりすることにつながると考えた。

以上を踏まえ、研究副題を次のように設定した。

2024 研究副題

本質を体感する学びを実現することを通して

### 3 研究の方法(2024年6月に設定したもの)

教科の学びを本質を体感する学びにすることで、生徒エージェンシーの発揮に向けたコンピテンシーや基盤となる力を育成することを目指す。そのために以下のプロセスを踏む。

- ① 教師が教科の本質を考える。
- ② 教科の本質に基づき、各単元でどのような力を身に付けるか構想する。あわせて、そのためのしかけを構想する。
- ③ 授業実践を行う。
- ④ 子供の学びの姿をもとにリフレクションを行い、各単元での子供の姿を記録したり、効果的なしかけを蓄積したりする。(子供の発言やノートの記述、自己評価の記録等)
- ⑤ ①～④を繰り返す。
- ⑥ 2月に本研究から見出したことをもとに研究紀要にまとめる。

<sup>4</sup> 小柳和喜雄 『専門的な学習ネットワークが授業改善に向けた教員の指導性と主体性の構築に及ぼす影響に関する基礎研究』

なお、本研究では子供を見とることを重要視し、子供の学びの事実をもとにリフレクションを重ねるようにする。

#### 4 これまでに見えてきたことと研究計画の修正

今年度の研究を進めてきた中で、生徒エージェンシーに関して見えてきたことがある。それは、生徒エージェンシーの捉え方についてである。本研究は生徒エージェンシーの発揮に向けて各教科の学びでコンピテンシーや基盤となる力を育成することを目指してスタートした。しかし、子供たちが学びの中でも生徒エージェンシーを発揮しており、その生徒エージェンシーを教師が尊重するからこそ、本質に向かう学びが実現するのではないかと考えが変容した。その考えに至ったのは、昨年度から本校の研究に携わっていただいている千々布先生を6月に招聘した際に「和歌山大学教育学部附属小学校の子供たちは、学びの中で生徒エージェンシーを発揮している姿が様々な場面で見られている。ここでいう生徒エージェンシーとは主体性とほぼ同義である。OECD 論では、ウェルビーイングに向かうためにラーニング・コンパスを回す原動力になるのが生徒エージェンシーと定義されているので、OECD 論でいう生徒エージェンシーは目的ではなく手段となる。したがって、教師は生徒エージェンシーを高めるために働きかけるのではなく、教科の本質に向かうために子供の生徒エージェンシーを尊重することが大事であり、和歌山大学境域学部附属小学校が目指すべき方向はそちらではないか。」とご助言いただいたからである。そこから、本校が目指すべき各教科の在り方を考え直すことにした。まず、私たちが行ったことは、生徒エージェンシーの捉え直しである。先述の通り、OECD 論では生徒エージェンシーは変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力と定義されている。この能力を発揮するのは、予測困難な社会の問題に出合った場面を想定していた。しかし、各教科の学びの中で学習問題を自分事とし、自ら目標を設定したり、学びを振り返ったり意味づけたりする姿が見られていることを鑑みて、学びの場面においても生徒エージェンシーを発揮しているといえると結論付け、改めて本校における各教科の学びを以下の様に設定した。

本校における各教科の学び；

子供が与えられた課題を受動的にこなすのではなく、自分の興味や目標に基づいて学びの方向性を決め、自らの力で能動的にその教科の本質に向かうこと

そこから様々な先行研究にあたり、各教科の学びの中でも、生徒エージェンシーが発揮しているということは溝上(2020)<sup>5</sup>が述べていることと重なることがわかった。溝上は、エージェンシー(agency)を「行為者(主体)が課題(客体)に対して前のめりに取り組む状態を指す」と述べており、主体性<sup>6</sup>と捉えることができるとしている。学習場面に限定して考えると、前のめりに取り組む対象は学習課題であり、子供たちが学習課題に対して主体的に取り組む姿がある学びを、生徒エージェンシーを発揮している学びといえる。溝上はそのような生徒エージェンシーが発揮している学びを3層に段階を分けて提起している(図2)。

<sup>5</sup> 溝上慎一『社会に生きる個性 自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー』p.102

<sup>6</sup> OECDの生徒エージェンシーは能力を指し、溝上の生徒エージェンシーは性質を指す。エージェンシーは厳密には力や性質といった一言で定義できるものではなく、文脈によってどちらの意味でも使われる。個人が自分の行動や決定を通じて影響を与える能力や権限を指す場合は力として捉えられる。一方、性質として捉える場合は個人がもつ内在的な特質や特性を指す場合である。

|             |                 |  |
|-------------|-----------------|--|
| エージェンシーの深まり | 人生型の<br>主体的学習   | 中長期的な人生の目標達成，アイデンティティ形成，ウェルビーイングを目指して課題に取り組む。    |
|             | 自己調整型の<br>主体的学習 | 学習目標や学習方略，メタ認知を用いるなどして，自身を方向づけたり，調整したりして課題に取り組む。 |
|             | 課題依存型の<br>主体的学習 | 興味関心をもって課題に取り組む。<br>書く，話す，発表する等の活動を通して課題に取り組む。   |

図2 溝上が作成したエージェンシースペクトラム

本校における各教科の学びにおける生徒エージェンシーを発揮している姿は、溝上のスペクトラムの自己調整型の主体的学習と重なる。したがって、本研究では、教科の本質に向かうために自己調整型のような目標に向かって自己決定したり、自己調整したりする子供の生徒エージェンシーを大事にするような学びを考えていきたい。そうすることで、受動的な知識の習得にとどまらず、相互の知識を関連付けた理解や批判的思考、応用力が育まれたり、教科の価値をより明確に捉えられたりすることが期待できる。また、特別活動や総合的な学習の時間等の領域の学びでは、人生型の主体的な姿を想定している。

また、生徒エージェンシーを発揮して養った本質に根差したコンピテンシーや基盤となる力は、学習場面以外での生徒エージェンシーの発揮にも良い影響を与えることが期待できる。教科の本質を体感することを通して学びに対する意義を実感したり、体感することを通して得た理解が批判的思考や問題解決能力を高めたり、学びの持続性を支えることになったりするからである。

以上を踏まえ、本研究では、学びの場面において生徒エージェンシーを発揮している姿を大事にしながら教科の本質を体感できるよう進めていく。それに伴い、研究計画を以下の様に修正した。

- ① 教師が教科の本質を考える。
- ② 教科の本質に基づき、各単元でどのような力を身に付けるかを構想する。また、その力を身に付けるためのしかけや生徒エージェンシーを発揮するしかけを構想する。
- ③ 授業実践を行う。
- ④ 子供の学びの姿をもとにリフレクションを行い、各単元での子供の姿を記録したり、効果的なしかけを蓄積したりする。(子供の発言やノートの記述、自己評価の記録等)
- ⑤ ①～④を繰り返す。
- ⑥ 2月に研究の成果と課題を研究紀要にまとめる。

以上、研究主題や方法を構想して研究を進めている。これまでの本校研究とはおよそかけ離れた新たな研究への旅に出ている。それは、コンパスを頼りにした冒険の旅であるといえる。答えが予め決まっておらず、そこに向かっていくような旅ではなく、私たちが進んできた道から見いだす旅である。道を間違えて後戻りしたり、道なき道を進んでいくことがあったりして何が起こるか分からない旅になる。子供たちに求めるものは、予測困難な来る社会

に出合ってもウェルビーイングに向けて積極的に働きかける能力である。その伴走者である私たち教員こそ、その姿勢が大事である。常に学び続け、互いにもっている知識を駆使しながら新たな学びの履歴を創り出すことそのものが、私たちのウェルビーイングであると信じて研究の旅を進めていきたい。

## 引用・参考文献

- ・OECD『Future of Education and Skills 2030 Project background』
- ・OECD『Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework』
- ・OECD『Student Agency for 2030 仮訳, 2030 年に向けた生徒エージェンシー』, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
- ・OECD『教育のスキルと未来: Education 2030 (仮訳)』, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
- ・OECD『Learning Compass 2030 仮訳, OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030』, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
- ・OECD『Learning Framework 2030(2030年に向けた学習枠組み)』, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編, 2017年, 文部科学省
- ・小柳和喜雄『専門的な学習ネットワークが授業改善に向けた教員の指導性と主体性の構築に及ぼす影響に関する基礎研究』, 2019, 奈良教育大学教職大学院研究紀要
- ・奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』, 2017, 東洋館出版社
- ・奈須正裕『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベースの授業づくりガイドブック ―資質・能力を育成する15の実践プラン―』, 2017, 明治図書出版社
- ・奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』, 2021, 東洋館出版社
- ・白井俊『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』, 2020, ミネルヴァ書房
- ・石井英真『授業づくりの深め方 「よい授業」をデザインするための5つのツボ』, 2020, ミネルヴァ書房
- ・石井英真『教育「変革」の時代の羅針盤: 「教育 DX×個別最適な学び」の光と影』, 2024, 教育出版
- ・千々布敏弥『先生たちのリフレクション 主体的・対話的で深い学びに近づく, たった一つの習慣』, 2021, 教育開発研究所
- ・溝上慎一『社会に生きる個性 自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー』, 2020, 東信堂
- ・溝上慎一『幸福と訳すな! ウェルビーイング論 自身のライフ構築を目指して』, 2023, 東信堂
- ・櫻井茂男『学びの「エンゲージメント」』, 2020, 図書文化
- ・『和歌山大学教育学部附属小学校研究紀要』, 2015~2023, 研究紀要和歌山大学教育学部附属小学校